に達漁船に乗り遅れたのは実に遺憾であつた童面高君や中井君は今や漢夫を引き連れて彼方に漕ぎ行くことの羨やましさ

さて之をも朗すきして居る言はも参らねば代の漢夫等を探しテンマに打ち乗りて陸地丸を下つたのである観音島の彼方より微風は吹き来つて漕口左舷を打ち丁々たる櫓声と相和して第一船の後を追ひ行き去る割しき潮汐に流されて漕夫も難困つたのである

28

山陰新聞

世九年四月十日

竹島渡航日記(四)　旅行者生

実際にアシカの居る所に行きて見れば聞いて居た談とは多少違つて居た如何にしても実見をしなければ捕獲する所は洞穴でなければならぬ一方かゝ他方に通ずる様な洞穴の中に多数群つて居るそこで一方の洞穴の前面に網を張り他方の洞穴には番人を置いて逃れ去ることを防ぐのであるやがて網も張り終れば我々のテンマは今や岸に到着し我れ先にと岩上に飛び移らんとする時遂一頭来つて網にかゝつたのである網の中さは凡そ四尺長さは適宜である網の目は七八寸と言ふ処である実にアシカは馬鹿なもので網の中を潜り出てんとする時網の目に頭をさすのである(そこで六分注意さへして居れば全く捕へらるゝのである)アシカは此小物らるゝものをと侮れば思はぬ若しこの獅子や虎の様に恐ろしく怖い所があれば殺捕ふる丈け壮快であろうされども彼れアシカなるものは何の抵抗もなさず女子供の様に無邪気に戯れて居るのか網にかゝつて水中で空息する呼吸が出来ずからくくと泡を生ずる所なとは実に気の毒なものであつた我々が捕ひしものゝ中では大なるものは長さ六尺小さきものとても四尺に余る筒様なものか僅か二時間も立つか立たぬのに十頭計り取れたのである筒様に容易く網にかゝる所は不敏なものである けれども実に其馬の様なものか殺戮と云く岩上に積み重ねていきなした所は何とも言はれない壮観である 初め吉の々はなかく思つて居た中井君の日記千頭捕獲と云ふ話は余りに大きいらしいと云ふとも今状態を目撃し却つて話より実際の大なることを知れたのである

洞穴の前面風静かに水清き所に後夫は今や網より アシカを奪ひ
け人として居る神西部長其他の人は黒い岩上に佇立して居る
我輩は漁船の上で素晴らしい所を大喝采の口笛一声宜しと言ふ所で
幕を閉じたのである

▲さてそれから再び漁船に乗して対岸の島に渡らんとしたが一頭の海
シカは来りて又水際の網の目に頭をさしたのである箇様なる有
様であつて実に止めるにも止められぬ程に面白く捕れ生きた
ままアシカは網の目の中で一寸頭を抬げて人を見ては又沈んで
居る誠に滑稽であつた其黒く曲つた所の頭をば時々水面に出す
所などは全くゆの中のカイツムリが浮沈するのと少しも違はない
様に見へた

▲豚や犬の様な声を放つた所のアシカは水の上に猫や兎の様な声を発す
る所の鳴は実に喧き騒き迷ふ所の数千の海鳥の中を伏々として
我々捕獲船の近おのである一双の屏風の如くに聳立する竹島西岸の向
に轟然たる波はとどろき渡り水平線は圓くそをつくることの外何も
見られもしないのである

山陰新聞　明九年四月十二日　旅行者　喜生

竹島紀行（五）

竹島は一個の大なる島からなつて居る一島は高さ四百尺他の一島は凡そ三百六
十尺高い方の島は到底登ることは出来ない低い方の島の西部には小石の
多い砂浜がある漁船は多く此場所に繋く砂礫の上には二間四方程あ
る小舎を建つ小舎の南方岩に掛け居る梯子あり之を傳ふて山に登
るへし道と云ふ道はかしもないのである登ることは凡そ二十間にして絶壁
より瞰下すれば海水は其下に鬱々来り怒濤を巻く加ふるに
丸太木を以てす長さ二間之を踏人て対岸の岩に取り着くのである
同行者に一人あり顔色灰の如く遂に渡らずして帰れり此異様
なる梯を渡れは何ぞ知らん益危険場所に向はんとは
▲又山に登り谷を越ゆる陰には随分危険なる所も少なくないものて
ある吾輩は従来屢々箇様なる危険を冒したるものである所が今
なる危険なる場所てはも距離さへ短かければ随分通過さるとも
てある然るに此島の様に初めから終りまて気も心も離すことの
出来ない様ては精神疲労してやりかねるものである敢て敬の

絶壁足もかゝらない様な岩の上に足を踏み手をかくんばなれる様な岩に手をかけて言ひく登らなければならない危険を冒した所で何の利益もなければ馬鹿くさい話だ或る人の如くに止めた方が利益であろうと思っては見たが又思ひ直して奮発したのである人の登る所でさへあれば我も出来さうなものと考へたさて凡そ三分の二まで取り着いたらんと思ふ所から漸く危険が減じたのである絶頂に至って初めて安心した安心した計りではなく其処に意外なことがあった非常な利益を見出したのである実に思ひてなければならないと思ふ千仞の効は一箕よりと興味限りなかった此利益と云ふのは即ちこの間上の利益であった之は後日取り纏めて話す積りである さて絶頂にある人を数へて見たならば神西事務官東島可岡崎雪次中井松浦和泉の人氏であったよく〳〵諸君は登られて感心の至りであった海とは異なって岡君の元気はなかなかであったが松を採って紀念の為めに植えられた

午后よりは風勢強く浪も亦高いので陸に帰ることは頗る困難である夫れ故止むなく鬱陵島に避難することになった西北の方向と陸地又は近くに見えたりと云ふ

▲暮色蒼然山上遠かに燈光あるもの二点鉦月は西の水平線の上に糸の如くに糸の如くに釣られたりと笛一声異域の公にとどろき渡り鬱陵島はじゃじゃ性の農民今や驚倒して居るであろう

▲西風は益々外に強かった為め殺風が陸地に吹けて岸洞の浜近く着いた此時午前八時半頃あらくは暗黒にして思ひ思った所の朝鮮国の鬱陵島が見えない見合の嫁の当てが外れた様な心地がした船は又一夜を明かさねばならぬ

同三十九年四月十八日
四月廿二日

鬱陵島の話　濱洲者某生

山陰新聞　明治卅九年五月廿三日

◎慰親会　暑きに竹島へ渡航せる廿余氏は昨日午後六時より隠水亭にて慰親会を開けり

同　卅九年六月六日

◎竹島報告書脱稿　暑きに迚も庁より竹島調査島へ渡航の際に於ける報告書は奥原碧雲氏に委嘱しおありしが今回愈々脱稿につき不日庁において印刷に付する筈